

サイエンスって楽しい、わくわくするよね

尾崎 美和子

アジアメディカルセンター, ディレクター(教授)/デューク大学-シンガポール国立大学
ジョイント大学院大学(Duke-NUS-GMS), Principal Investigator (PI)

<仕事の内容とやりがい>

私が組織トップを務めるアジアメディカルセンター(AMC)は、シンガポールの科学技術開発の主要拠点バイオポリスに拠点をもち、主に医療機器/ヘルスケア関連の最先端技術(センサーやプローブといった部品や製造ラインも含む)開発を行っている。行政、企業、研究機関、市場を結ぶプラットフォーム機能を持ち、開発とそのビジネスに興味を持つ人材が世界中から集まっている。この10年ほどでAMCは6000人を超える訪問者を受け入れた。企業ニーズにあった開発研究と自身のバックグラウンドである神経科学分野の研究にも携わる。南国の青空の下、趣味が仕事になっており日々エキサイティングな生活を送っている。

<進路決定のきっかけ>

子供の頃から科学に興味があり、早い時期から研究者を志していた。しかしながら、長い間両親からは研究者になることを強く反対されてきた。両親を騙し騙し紆余曲折の進路を歩んだが、今は自分の希望通りの職種と研究環境に身を置くことができている。研究対象を決定したのは20歳代前半。必要な技術を修得した大学院博士課程修了直後に、生涯の仕事としての具体的な研究課題を設定した。要所要所で進路を決定づけたきっかけは、生命現象の不思議である。それらを科学に落とし込みたいと思っていた。結果論として、誰のアドバイスもこの好奇心には勝てなかったことになる。

基本「家庭に仕事は持ち込まない、仕事に家庭は持ち込まない」をモットーにしている。その為、一時期自分の給与は全てベビーシッター代に消えたこともあった。乳幼児から小学校中学年くらいまでの子育てはかなり面白く、家庭では思いっきり子供に付き合った。親としてこの機会を逃すのは惜しいと思う。女性の人生、介護の負担を負うことも想定される。これも完全に分けてきた。家族と過ごす時は仕事を忘れてることが多い。逆もそうである。仕事とプライベート、生活スタイルが全く異なる為、それぞれの生活を楽しむようにしている。

自分の人生を振り返って思うのは、自分が没頭でき楽しいと思うことを諦めないことが幸せの道ではないかと思う。研究者志望の場合、性別関係なく将来の生活不安が少なからずある。我が子には、研究者志望なら自活できる手段を身につけたのち研究者になるようアドバイスしてきた。殆どの分野、それから研究に専念しても遅くはない。“**自分のサイエンス**”ができるかできないかは、いつ研究室の主権者になるかの方が影響する。“**科学者**”になるからには、誰かの後追いではない**独自のサイエンス**を目指して欲しい。そこに科学者としての本当の醍醐味がある。

<仕事と家庭のバランス>

<進路選択に対してのメッセージ>

<プロフィール>



東京理科大学薬学部卒業→東京理科大学薬学修士課程修了→総合研究大学院大学(国立遺伝学研究所)博士課程修了・博士(理学)取得→日本学術振興会特別研究員(DC, PC)→大阪バイオサイエンス研究所研究員→米国国立衛生研究所博士研究員→理化学研究所研究員→プロジェクトリーダー→早稲田大学教授→A*STAR(シンガポールの行政機関)-Duke-NUS Neuroscience Research Program シニアフェロー→Asia Medical Center, Chairperson & Executive Director, PI 現在に至る。兼務所属 & 役員多数。